

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】山本 佐恵

【所属】筑波大学大学院人間総合科学研究科

【研究題目】日中戦争期における日本のナショナル・イメージの生成
——米国開催二大万博における日本の対米文化宣伝活動——

【研究の目的】

本研究は、日中戦争下の万博であるニューヨーク万博 (New York World' s Fair, 1939) とサンフランシスコ万博 (Golden Gate International Exposition) を取り上げ、同万博での日本政府による対米文化宣伝活動の実態を明らかにし、その役割を検証することを目的としている。

1930年代の日本は、満州事変、国連脱退、日中戦争と、国際的に孤立を深めつつあり、こうした政治状況の悪化は、外国人観光客の減少と輸出の不振となって日本経済に大きく響いていた。そのため日本政府は、ニューヨーク万博とサンフランシスコ万博を、アメリカ人に対して日本の良きイメージを宣伝する文化宣伝の場として非常に重視した。本研究は、日中戦争下における日本の対外文化宣伝を、映画・写真・美術・建築・工芸といった様々なジャンルの制作者を動員した万博の展示という新たな切り口から検証する。

【研究の内容・方法】

本研究の内容は、①日本政府は自国の良きイメージを宣伝するためにどのような展示を行ったのか、②日本のこうした文化宣伝のための展示はアメリカでどのように受け止められたのか、という二点について実証的調査を行い、考察するものである。

そのために、①の日本が行った展示内容については、国立公文書館、外交史料館、国際交流基金等の公的機関に保存されている公文書（「外国博覧会関係雑件 紐育並桑港万国博覧会」外務省外交史料館所蔵、「国際文化振興会関係」外務省外交史料館所蔵、「国際文化振興会関係史料」国際交流基金図書室所蔵など）の史料調査を中心に行った。それと同時に、国立国会図書館、東京大学東洋文化研究所、各大学附属図書館で、1930年代に発行された新聞、雑誌、機関誌（『アサヒカメラ』、『ギャラリー』、『フォトタイムス』、『建築雑誌』、『国際建築』、『広告界』、『国際文化』、『東京朝日新聞』、『萬博』など）の網羅的な調査を行った。以上の調査から、ニューヨーク万博及びサンフランシスコ万博における日本の展示内容がかなり明らかになった。

②の日本の文化宣伝のアメリカ国民に対する影響については、ワシントン D. C. にある米国国立公文書館 (U. S. National Archives and Records Administration) でニューヨーク万博及びサンフランシスコ万博に関する公文書を調査し、日本に関する資料を収集した。また、アメリカ議会図書館 (Library of Congress) で万博の開催地であるアメリカで発行された新聞のローカル紙 (New York Times, New York Herald Tribune, San Francisco Chronicle, Washington Star, Wall Street Journal, Washington Post, Los Angeles Times, Chicago Tribune) を中心に調査を行い、日本に関する記事を収集した。

【結論・考察】

国家として初めて公式に参加した 1873 年のウィーン万博以来、日本にとって万博は、西洋的価値観が支配する世界にあって「日本のアイデンティティ」を自らに問い直す場でもあった。そして従来の万博で日本は、美術工芸品に代表される日本の伝統技術を用いた出品物によって、自国を「独自の伝統と美意識を持つ国」として提示してきた。

しかし、日中戦争の影響により欧米での日本の立場が変化したことを受けて、ニューヨーク・サンフランシスコ万博ではアメリカ国民に「真の日本の姿」を知らせるという新たな命題が加わった。「真の日本の姿」を知らせることとは、欧米人に反感や違和感を抱かせない形で、現代の日本の社会や日本人の生活を紹介することだった。そのためニューヨーク万博では、日本は「古き伝統の国」と「躍進する新しい国」という二つの対極的なイメージを、日本のアイデンティティとして提示することになった。両万博において日本は、この二つのイメージを喚起する展示を行うことによって、欧米人の目を日中戦争という現実から逸らさせ、「平和国家」としての日本をアピールしようと意図したのである。